



【2013-04-13】

裏土御門 陰の長者

「幕末動乱編」

連載第4回 「加冠の儀」

虹岡 思惟造

第四章 加冠の儀

十津川での剣術修行が二年を過ぎ、心形刀流の目録が許されたのを機に、修業を終えて京都に帰るよう父からの指示があった。掬麿がもうすぐ十五歳を迎えるので、元服させることを父は考えてのことのようであった。十津川の二年間は、これまで経験したことの無い環境下での厳しい修業の日々であったので、十津川にいた時は、時間の経過がとても長く思えたが、京都の安倍屋敷に帰って振り返ってみれば、その二年間が何とも短く、また懐かしく感じられるのであった。

十五歳の誕生日を迎えて数カ月経ったところで、掬麿の元服式が執り行われることになった。元服式は中心は加冠の儀であり、童形の髪型を改め、冠親から冠を授かるという成人を祝う儀式である。元服式は公家社会でも、武家社会でも盛大に行われたが、中でも冠親の選定が重要とされていた。掬麿の冠親は、安倍本家であり陰陽寮の頭である安倍晴雄が務めることになった。誰が冠親になるかは、後々の出世にも影響すると言われるほど大切なこととされており、安倍晴雄が冠親に決まり父親の晟義も大安堵であった。しかし晴雄は、陰陽道の第一人者との自負が強く、儀式についてあれやこれやの注文や駄目だしをしてくるので、準備が何かと大変であった。それでも何とか予定の日取りまでに、すべての準備が整い、下京の裏土御門家の屋敷で元服式が執り行われることになった。

式当日、成人の髪型に結い上げ冠を頂いた掬麿の姿は如何にも凛々しく、花の貴公子と謳われた亡き兄を彷彿とさせるものがあった。元服式には親族の者を中心に多くの関係者が招かれていたが、その中に一人の少女がいて、そんな掬麿の姿を熱心に見つめていた。安倍晴雄の娘の澄姫である。澄姫の正式な名前は土御門藤子、このとき十二歳であった。父親から裏土御門家で元服式があると聞き、その様子を是非見てみたいとせがんで連れて来て貰っていたのだ。父の晴雄としては、通常であれば、そのような我儘は聞き入れないのだが、年若くして宮仕えをすることが決まった藤子を不憫に思って、特別に願いを叶えてやったのであった。

掬麿も、式の最中、見慣れぬ姫君が、じっと自分を見つめていることに、気付いていた。聡明さと、利かん気な性格を伺わせる表情が印象的な姫君であった。その時の藤子の姿形は思い掛けず、掬麿の心に深く根付くことになる。

元服を機に、掬麿は諱として溥明を授かり、六位に叙せられて蔵人見習いとして朝廷に出仕することになった。掬麿改め溥明が出仕する御所は、昨年火災焼失したものを、今年になって平安様式により再建したものであった。まだ木の香も芳しい御所の主は、第百二十一代天皇の孝明帝二十四歳である。孝明帝は大の異人嫌いで、攘夷鎖国思想の持ち主であり、頑なとも言えるその信念は、終生変わることがなかった。

ところで、溥明が御所で働く場は紫宸殿の蔵人所である。蔵人所はもともと天皇家の家政機関として、書籍や御物の管理を司る役所であったが、次第にその権限を拡大して行き、溥明が出仕した幕末においては、詔勅、上奏の伝達や、警護、事務等殿上におけるあらゆる事を取り仕切る機関となっていた。蔵人見習いは補助的な雑務処理などを命じられるのが普通であったが、裏土御門家の溥明は、占術や呪術が使えられると思われていたことに加え、剣術の腕を見込まれて、帝の

身辺警護役を委ねられることになった。当時、御所の警護は、全国の雄藩に割り当てられていたのだが、これらの諸藩の兵は御所の出入り門を主に警備し、帝や公家の身辺警護を行う役割は担っていなかったたのである。

溥明の朝廷出仕と前後して、土御門藤子も御所に上がっていた。孝明帝の異母妹である和宮の乳母という役目であったが、和宮が八歳、藤子は十二歳であり、実際のところは、和宮の少し年上の遊び相手若しくは学友といった役どころであった。そのような次第で、溥明と藤子は同時期に御所に仕えていたのである。帝の側近と雖も奥向きの女官とは滅多に顔を合わすことがないのが御所の常であった。しかし、溥明は帝の身辺警護役として、女官達が詰める内裏奥にも随行したので、そんな時には藤子の姿を見かけることがあった。



女官達にとって、帝に付いて奥まで来る若い公達は目立つ存在であり、新任の若い蔵人見習いに興味津津であった。そんな女官達は、藤子が溥明と同族であること知ると、溥明のことについてあれこれ問い質すのであった。

「藤子様と、あのお方は共に安倍家のご同族であらしゃるとか」から始まって「お二人は、以前何度もお会いした仲との噂を聞き及びましたが、ほんまどすか」などの噂話に及び遂には「許嫁の間柄とか、うらやましいことどすなあ」と、話がどんどん飛躍して行く。

躍起になって打ち消す藤子であったが、周囲の女官達は宮仕えの格好の退屈しのぎとして、寄ると触ると溥明と藤子の話をするのであった。

この当時、米国の始めとする列強が開国を迫っていたが、御所の奥向きでは、それ程の切迫した空気はなく、女官達の間では他愛もない話題に打ち興ずる余裕がまだあったということであろう。

しかし、江戸幕府は、アヘン戦争で清国がイギリスに敗北したことを承知しており、列強の侵略について現実的な脅威を感じていた。老中首座となった堀田正陸など幕府の要人たちは、米国の始めとする列強の開国要求をなんとかはぐらかして先延ばしを図りつつ、その一方で、江戸に講武所、長崎に海軍伝習所を開設するなど、軍備の洋式化を急いでいたのである。

それでも、溥明と藤子が御所に仕出して数年間は、大過なく時が経過し、溥明が十八歳の時、蔵人に昇進した。六位蔵人は、亡くなった兄も任ぜられた帝側近の誉れの職位である。

その後も平穏な日々が続くかに見えたが、安政五年（1858年）、京都御所は大混乱に陥ることになる。その騒ぎは、日米通商条約締結の勅許を得ようとして、幕府老中の堀田正陸が上洛してきたことに端を発する。なおこの当時、既に日米和親条約が締結されていて、下田と函館がすでに開港され、下田にはハリスが総領事として赴任していた。強固な攘夷思想の持ち主の孝明帝であったが、薪水給与等の温情的な和親条約であれば「神国日本を汚すことにはならない」との

考えでこれを容認していた。しかし、今回の通商条約締結は異国と同等の立場で自由な通商を行うことを目的としており、従来の秩序に大きな変化をもたらすものであったから、孝明帝としては幕府の要求を到底受け入れることが出来なかったのである。このような状況下で起きたのが、廷臣八十八卿列参事件である。岩倉具視や中山忠能（なかやまただやす）ら合計八十八名の堂上公家が条約案の撤回を求めて抗議の座り込みを行った事件である。公家が集団で実力行使するという、前代未聞の出来事であった。

堀田老中が参内した数日後の安政五年三月十二日、御所は異常な緊張に包まれていた。勅許を阻止する為に、過激な一部の公家達が何事か企てているとの情報が飛び交っていたからである。そんな状況だったから、溥明は何時になく緊張した面持ちで、帝のお出ましになるのを内裏奥御殿の控えの間で待っていた。そんな溥明のもとに、一人の女房がやってきて文を手渡したのである。使いに来たのは藤子に仕える女房で、溥明もかねて見知った者であった。実を言えば、この数カ月来、溥明と藤子は文を交し合う仲になっていたのであった。噂が先行して、その噂に引きずられて、本当の恋に移行するということは、今も昔もあるが、溥明と藤子の仲もまさにそのようは経緯を辿り、何時しか親しい関係となっていたのである。しかし、いくら恋仲となったからといって、今日のような日に、色恋の文を届けるような、藤子ではない。藤子が聡明な女性であることを溥明はよく承知している。何か大事が発生したに違いない。

『何事であろう』溥明は早速、封を解いて、文を読む。

その内容は、父の土御門晴雄が、勅許許可を阻止する為の参内強行計画に関与しており、そのことについて早急に相談したいというものであった。

ごく一部の過激派の公家による企てとの噂であったので、まさか晴雄が関与しているとは思ってもしなかったことであった。過激派とは言えない晴雄までもが加わるとなると、事は重大である。公家が大学して参内を強行すると言う大事件に発展するおそれがあった。

土御門晴雄は安倍一門の総帥である。晴雄がこの企てに参加するか否かは安倍一族の命運に係る問題であった。裏土御門家の溥明としても他人事ではない。溥明は手早く返書を認めると、部屋の外で待っていた女房に手渡した。

その日の午後、帝が食事と休息のため内裏に戻るのを見計らって、溥明は藤子の部屋に出向いた。溥明と藤子の仲は、女官達のすべてが知る所であり、また内裏の主である和宮もその仲を認めていたので、少しの間であれば、御所内で会うことは大目に見られていた。

溥明が部屋に入ると、藤子がすぐに要件を切りだした

「どないしたらええんやろ？ 父君が今夜かて、同僚の公家達と御所に押し掛けると言うてはるようどす」

このところ、目に見えて女らしい色香を発するようになった藤子を、抱きしめたいという誘惑に一瞬駆られるが、溥明はそんな感情を表に出さず答える。

「その企ては、侍従の岩倉殿が中心になって画策しているようです。晴雄様以外にも、公家のほとんどが同調する勢いです」

この頃になると、企ての具体的な内容が御所中に広まっていた。どの公家も熱に浮かされたよ

うに強行参内を唱えており、その勢いは止まることを知らぬ有様という。

「帝はこの動きをご存じであらしゃりますか？」

「帝側近の公家達もその企てに揃って賛同しているので、誰も帝の耳にお入れしていないでしょう」

「溥明様のお口から、帝にお伝えして、この企てを阻止しはる訳には行きませぬか？」

「今となっては、帝と雖も公家たちの動きを阻止することは出来ないでしょう。帝の耳にお入れしても宸襟を悩ますばかりとなるに違いありません」

打つべき手立てが見つからないまま、時は瞬く間に過ぎて、溥明が帝の側に戻らねばならない時間となった。なす術はないが、藤子は溥明に相談して心が大分安らいだ。堂上公家の大部分がこの企てに加わるのであれば、もし咎められても、その全てを厳しく罰する事は出来ないであろう。そのように考えることにして、藤子は心を休めたのだ。

その夕刻、続々と御所に押し掛けた公家達の数は一十八名にも上った。正二位 中山忠能を筆頭に、五位以上の公家のほとんどが御所内で座り込みを実行し、勅許反対を唱えたのである。

このような突き上げもあって、孝明帝は益々頑なになって、条約勅許を拒み続けた。こと此処に至り、勅許を得ることを断念した堀田正陸は江戸に帰り、その責任をとって大老を辞任する。

～次号に続く～